Osaka University Knowledge Archive

Title	日英翻訳では何が問題となるのか : 留学生センターの授業から
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 2005, 3, p. 49-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9799
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日英翻訳では何が問題となるのか
― 留学生センターの授業から ―

小倉　慶郎

【要旨】

本稿は、留学生日本語教育センターで筆者が担当する「日英翻訳」の授業報告であると同時に、授業の中で筆者が遭遇した日英翻訳の問題点を綴った翻訳論でもある。『イラスト日本まるごと辞典』、『キッチン』、「天声人語」を教材とした授業から、受講生が躓いた例やプロの翻訳の実例などを挙げて翻訳の解説をする。日→英翻訳は、英→日翻訳とは違って原文を思い切って改変する例が多い。本稿では、なぜそのような改変をするのか、またしなければならないのかを詳細に考察していく。日本語と英語は言語的にも文化的にも遠く隔たっている。その両言語間で「メッセージ重視」の翻訳をしようとする時に、多くの改変が必要となることがわかる。現在、日本の商業翻訳で行なわれている種々の手法を学ぶことは、外国人留学生の将来にプラスとなると筆者は考えている。

はじめに

筆者は2002年から、大阪外国語大学留学生日本語教育センターで「通訳」と「翻訳」の２クラスの授業を担当している(1)。以前から、民間の通訳・翻訳者養成学校で日本人向けの授業を担当してはいたものの、外国人留学生に対して「通訳」「翻訳」の授業をするのははじめてであり、授業は、新しい発見と驚きの連続であった。その驚きはいまでも続いている。

「通訳」「翻訳」の授業といっても、私は数カ国語に堪能なmultilingualではないから、あくまで日英両語間に限られる。ところが受講生の方は、私と違って才能豊かである。アメリカ人、ニュージーランド人、オーストラリア人など少数の英語母語話者もいるが（彼らは、通例日英のbilingualである）、大半は３－５ヶ国語に通じているmultilingualばかりだ。しかもそれぞれの言語の習得度もかなり高いレベルに達しているようだ。母語が流暢なのは当然のことだが、私の授業は、日本語と英語の双方が上級レベルでないと受講できないから、（少数の例外はあるものの）日本語は上級、英語も母語話者並みという申し分のないレベルの学生ばかりが集まった。

私の授業を受講したウクライナ人（女性）は、「自分の第一言語は２つある」と主張する。つまり、ウクライナ語とロシア語が第一言語でありどちらも習熟度は変わらない、という。さらに母親がルーマニア人であるためルーマニア語も話すことができ、その上英語・日本語とも上級レベルに達している。実に５ヶ国語の高度なmultilingualである。やはり同時期に受講したブルガリア人（女性）も、ブルガリア語・ロシア語・フランス語・英語・日本語の５ヶ国語を自由に操る。母国では副大統領の通訳など、プロの通訳経験も豊富であるというから、どちらが教師かわからないほどだ。2003年には国際会議通訳経験者も受講していて、英語とロシア語間の同時通訳を経験している、という（ロシア人、女性）。授業では、彼女の日英の通訳を聞いただけだが、特に英語の流暢さには舌を巻いたものだ。

本稿では、紙数の都合で「翻訳」の授業のみを扱うこととするが、どちらのクラスも言語能

力の高い留学生が私のクラスを受講してくれたのは幸運だった。

当初、「翻訳」の授業で悩んだのは、英→日（以下英日）、日→英（以下日英）のどちらを教えるか、という問題だった。翻訳をする際、習得度の高い言語—たとえば母語—へ転換するほうが容易であることは論を待たない。その方が、より完成度の高い翻訳ができると考えられている。本センターで学ぶ留学生の場合、日本語よりも英語の習得度の方が常に高いようだ。

さらに、留学生が日本から帰国したあと、どちらの言語へ翻訳をする機会が多いだろうか、と考えた。通訳ならば母語から日本語へ転換する必要も出てくるだろうが、翻訳に限って言えば、母語への翻訳の仕事しかないだろう。そして受講生の母語の大半は印欧語である。それならば、同じ印欧語に属する英語への転換を第一に考えるべきではないか。その方が、将来のキャリアに役立つ可能性が高いのではないか。そう考えた私は、翻訳は日英のみに限定して英日は行なわないことにした。留学生日本語教育センターには、すでに英日の翻訳の授業が存在することも、そのように決めた大きな理由だ。

本稿では、2002～4年に担当した「翻訳」クラスの授業報告をしながら、授業の中で私が遭遇した日英翻訳の問題点を取り上げ、整理していきたい。

1.授業の概要

まず、授業の最初に教材を配布する。そして生徒をひとりずつ指名し、書かれている日本語を音読してもらうことから授業は始まる。1－2行読んでは、原文の日本語の正しい読み方（いかに漢字にルビを振るか、アクセントは正しいか）を確認する。それから単語の意味の確認、語句の解釈へと移る。作者が伝えようとしているメッセージは何であるかも議論の対象となる。そのあとに、いよいよ翻訳作業だ。作業中も受講生の手が挙がり、不明な箇所についての質問がとんでくる。作業が終了すると、各自の英訳を音読して発表してもらう。それに対して私がコメントを加え、生徒からの意見を求める。そして最後には、プロの翻訳者がどう訳したか、実例を提示する。ここが授業のクライマックスといえよう。この時、生徒から思わず感嘆の声が漏れることもある。プロ翻訳者の技量に感心するのだ。

翻訳というと、「タテのものをヨコに直す」作業と考えている人が多いようだ。言語学的に親戚同士の言語間であれば、そのような感覚で翻訳することも可能かもしれない。しかし文法、単語、語順、発想、その裏にある文化など、ほとんどすべての面で大きくかけ離れている日英両語間の場合、「タテのものをヨコに直す」だけでは済まされない。表面的には言葉がうまく置き換えられたようにみえても、言葉の裏にあるメッセージの段階で、「誤訳」となってしまうことがしばしば起こるからだ。

本稿では、「直訳」ではすませられない日英翻訳の実例を中心に取り上げる。プロの訳例では、原文が一部削除されたり、原文にはない語句が付け加えられたりしている。なぜ訳者がそのように訳したのか、その必然性を考えていくと日英翻訳のメカニズムが浮かび上がってくる。授業ではプロの訳例検討が重要なプロセスであるため、教材には、日本語とその対訳が手に入るものを選んだ。この3年間、さまざまな教材を使用してきたが、本稿では『イラスト日本まるごと辞典』（講談社インターナショナル）、「天声人語」、吉本ばななの『キッチン』を教材として用いた授業と考察を紹介したい。

2.『イラスト日本まるごと辞典』

これは、イラストと英日対訳で、日本事情・文化を簡潔に説明した辞典である。日本語・英語とも平易であるから、来日したばかりの留学生に翻訳の手ほどきをするのには格好の教材だ。最近は、最初の授業では必ず『まるごと辞典』使用しているが、受講生からは好評である。

お辞儀
日本人は握手の代わりにお辞儀をする。また、感謝、おわび、お願いなどの気持ちをお辞儀であらわす。場合に応じてその深さも変わる。

Bowing
Instead of shaking hands, the Japanese bow. They also express gratitude, apologies, and requests by bowing. There are different ways of bowing depending on the situation, shown by how deeply you bend forward.

「場合に応じてその深さも変わる」は、十分に内容を把握しないと意外に翻訳に苦しむ。この部分を直訳してThe depth of bowing depends on the situation.とした生徒もいた。はじめての翻訳ではやむを得ないが、これでは何のことか読者に伝わりにくい。日本語で読んでも英語で読んでも理解度が変わらないような訳文にしたい。

英訳例は「状況に応じて、さまざまお辞儀の仕方がある。それはお辞儀の深さによって表される」と長くなったが、このようにことばを補って訳すと、原文のメッセージが過不足なく伝わることがわかる。

座敷では、座布団からおり、手前に両手をついてお辞儀をする。

In a *tatami* room, you move to the side of the cushion to show respect to the others present and then bow with your hands placed in front of you.

「座敷とは何か？」という質問が生徒からあがる。それに対し、別の生徒から「日本式の部屋と考えて、a Japanese-style roomとしては」という意見が出された。しかし今翻訳しているのは、日本辞典なのだから「日本式の部屋」なのは当たり前だ。英訳例のように a *tatami* room とした方が、イメージが明確になって好ましい。

ここで生徒の大半が「座布団からおり」の状況がわからなかった。また「『手前に』とはどこの前か？」という質問も出た。座布団のある部屋でお辞儀をするという行為を実際に見たことがなかったのだろう。状況をイメージできなければ、言葉づらだけで翻訳することは不可能である。「手前」とはこの場合「自分の前」である。

英訳では「なぜ座布団からおりるのか」という理由を、to show respect the others present（居合わせた人に敬意を表するため）とし、原文には無い語句を補っている。ここは日本人であれば何も考えないが、西洋人なら疑問に思うところである。日本人が無意識に前提とし

ていることが原文では抜けており、英訳ではそれを補っているのだ。読者を意識することが、実務翻訳の特徴である。

手土産
知人やお世話になった人の家に訪問する時には菓子折りなどの手土産を持参する習慣がある。手土産を渡す時に「つまらないものですが....」ということもあるが、これは謙虚な気持ちを表している言葉にすぎない。

Gifts
It is customary to bring a gift, such as a box of sweets with you, when you visit your acquaintances or those to whom you feel some obligation. When offering a gift, Japanese will usually say, "This is trifle," which simply expresses a self-effacing attitude.

「『お世話になった人』とは何か？」という声が上がる。ほとんどの生徒が戸惑うところだ。だが少しヒントを出せば、「people whom you are indebted toがいい」という答えが返ってくる。

「つまらないものですが」と自分を卑下するのは、日本語特有の表現だと考えがちだが、英語圏ではIt's not much.（アメリカ人、男性）、Nothing special.（ニュージーランド人、男性）という表現があることを生徒から指摘された。ただ英語圏では、本当にたいしたものではない物を渡す時に、このような表現を使うようだ。一方、日本人の場合は「高価なおみやげ」や「高級料理」でも「つまらないもの」「たいしたものもございませんが」ということがあるから、やはり違いはあるのだと私は考える。

「謙虚」をself-effacingとするのは、ややformalすぎるかもしれない。英語母語話者がかろうじて知っている程度の難しい単語だからだ。より一般的にはhumble, modestを使うのがいいだろう。また、non-native speakerが読者だとわかれば、もう少し単語のレベルを落としてexpress politenessとした方が好ましいかもしれない。要するに、誰がこの訳文を読むのか、読者を常に想定するのが実務翻訳である。読者への意識が、学校で行なう翻訳と商業翻訳の大きな境目となるのだ。

名刺
仕事においては初対面の人とは、会社名、役職名の入った名刺を交換する。

Meishi (Namecards)
In business, people exchange namecards when they are introduced. This card is printed with the name of the person, the company and his/her title on it.

「初対面」はwhen they meet for the first timeとしそうだが、読者から「日本人は知らない人に会ったら誰でも名刺を交換するのか」と誤解されるかもしれない。一般読者向けの英訳

は、あくまで、日本事情をまったく知らない人々を念頭に置かなければならない。訳例のようにwhen they are introduced（紹介された時に）とすれば、「改まった場ではじめて会った人」「自己紹介をしなければならない人に会った時」というニュアンスが出てきて、日本語のメッセージと英語のメッセージが合致する。これなら誤解は生じないだろう。

名刺はbusiness cardともいう。「会社名、役職名の入った名刺」を直訳して、This card is printed with the name of the company and the person's title on itとすると「人名」が抜けてしまう。注意しないと気がつきにくいところだ。名刺に「人名」があるのは日本人にとっては常識である。だから、わざわざ「人名は印刷されている」といわなくても誤解は起きない。ところが、英訳の場合は「人名」をつけなければ誤解が起きる可能性が出てくる。

結婚

昔から結婚は家同士がするという意識が強く、結婚式や披露宴も〇〇家といった姓で表されることが多い。

Weddings

Traditionally, marriage has been considered a matter between families rather than individuals, and wedding ceremonies and receptions are conducted as such under the family names.

「家同士（の問題）」をa matter between familiesと訳したのでは弱い。「個人の問題というよりも家同士の問題」とrather than individualsを補ったところが訳者の腕の見せどころといえよう。西洋の読者を意識し、個人間で結婚を決めることが多い、西洋の事情と日本の事情を対比させたのである。

なお「〇〇家」の意味がわからない受講生が多かったが、英語には対応する表現はない（such and suchという言い方はあるがここでは不適切）。「〇〇家」の部分は訳さず、単にunder the family namesとしても十分にメッセージは伝わる。

見合い

仲人は、簡単な自己紹介文と写真を双方の家に届け、互いに気に入れば見合いが成立する。ホテルやレストランなどで会い、気に入れば交際が始まる。

Miai

Matchmakers deliver photos and simple self-introductory notes to a prospective man's and woman's family. If they are interested in each other, a *miai* meeting will be arranged. Usually they are introduced at a hotel lobby or restaurant, and if they are interested in each other, they start dating.

「見合い結婚」はarranged marriageと訳されることが多い（いま手元にある研究社『新和英中辞典』でもこの訳語が載っている）。が、これでは「結婚をする二人の意志とは関係なく、

親同士の都合で結婚させられる」というニュアンスが出てきてしまう。日本文化の誤解につながりかねない。そもそも「見合い」という制度は西洋にはないので、英訳には細心の注意が必要となる。

「ホテルで会い」をwhen they meet at a hotelと直訳すると大問題が起こる。どのような問題が起こるのだろうか、まず想像していただきたい。これは最初にアメリカ人（男性）に指摘されたことだ。彼は笑いながら言った。「先生、このまま直訳すると日本人はそういう民族(sexually active）だと思われてしまいますよ」。なるほど、年頃の男女が2人だけでホテルで会えば、当然、性交渉を意味する。日本人は、お見合いとはそういうものではない、という前提があるから考えてもみないことだ。そこで誤解を避けるため、英訳では会う場所をhotel lobby（ホテルのロビー）と限定し、meet（会う）ではなくbe introduced（紹介される）とした。これなら「仲人や両親などが同伴していること」が暗に示されるから、誤解は起きないだろう。

「原文にはそう書いてあるから」といって言葉の上っ面だけを訳そうとする人がいる。いわゆる「直訳」だ。それがいかに軽率な行為となりうるかを知ってもらうには、これは格好の教材だ。ここで訳者は、さっと読んだだけでは気づかないほどのわずかな改変を施しただけで、誤解を避け、原文のメッセージを的確に伝えたのである。こういうのを「プロの技」というのだろう。

なお受講生の一人（オーストリア人、男性）は、a miai meeting をa blind dateとする訳例を示した。もちろん「見合い」と「ブラインド・デート」は違うものだが、二つの文化の間に同じ概念・語句がない場合、cultural equivalentで説明することがある。これは日英翻訳の常套手段である。私は「見合い」を「ブラインド・デート」と訳しても大きな問題はないと思う。少なくとも、前述のように「見合い結婚」をarranged marriageと訳すよりは、日本の事情を西洋読者に的確に伝えられるのではないだろうか。

ここまで見てきた日英翻訳を要約すれば、「読者を意識し、両言語間のメッセージを対等にする作業」といえるかもしれない。表面的な単語の置き換えではなく、文の裏側にあるメッセージを常に意識して微調整しながら作業を進めているのだ。そもそも言語・文化的に相当な距離のある日英語間で翻訳をすれば、メッセージにズレが生じるのは当然であろう。その「ズレ」を最小限にするため、訳者はさまざまな改変を施している、と考えられるのである。

3.『キッチン』

外国人留学生に、「最も好きな日本文学作品は何か？」と訊くと、女性を中心に常にトップの位置を占めるのが吉本ばななである。英語以外にも数ヶ国語に翻訳されており、英語版の吉本ばななの作品を読んで日本に憧れた、という受講生すらいる。使われている日本語はあまり難しくないし、留学生の関心も高い。日本文学作品翻訳の手始めには、最適な教材と思われる。

私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。

どこのでも、どんなのでも、それが台所であれば食事を作る場所であれば私はつらくない。できれば機能的でよく使い込んであるといいと思う。乾いた清潔なふきんが何枚もあって白

いタイルがぴかぴか輝く。

The place I like best in this world is the kitchen. No matter where it is, no matter what kind, if it's a kitchen, if it's a place where they make food, it's fine with me. Ideally it should be well broken in. Lots of tea towels, dry and immaculate. White tile catching the light (ting! ting!).

「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う」という曖昧な出だしに対して、拒否反応を示した日本人評論家がいたそうだ。この部分は、「私がこの世でいちばん好きな場所は台所である」もしくは「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だ、と私は思う」のどちらかであるべきだ、というのである。(2)よほど厳格な言葉遣いに慣れた評論家なのだろう。

英語を母語としない受講生の場合、ほとんどがここでひっかかり、文字通りI think the place I like best in the world is the kitchen.ないしはそれに近い表現で英訳してしまう。だが、これは英語としては奇異に響く。I thinkとは「たぶん～だろう」と自信の無い時に使われる表現であるから、「私がいちばん好きな場所は」という断定的な表現と矛盾するのである。英語を母語とする生徒は、I thinkとは絶対にしない。訳例でもI thinkを削除してある。

「つらくない」という言い方は、日常使われる日本語ではないので、多くの受講生が戸惑った。ここでは「それで構わない」「それでいい」の意味だ。こういうところは日本人なら疑問に思わないし、受講生ほどの日本語力があれば何となくわかるから読み流してしまうところだが、翻訳をすると細かな問題点に改めて気づかされる。

「機能的でよく使い込んである」も簡単そうで難しい。受講生の一人は、fully functional and easy to useと訳したが、これでは最新型の「システムキッチン」を想像してしまう。ここはあくまで日本の台所なのだから、訳例のようにwell broken in（よく使い込んである）だけでよいだろう。これだけで原文のイメージが、誤解なく伝わっているからだ。これも原文を直訳すると、メッセージレベルで「誤訳」が発生する例である。

「ぴかぴか輝く」は、いわゆるオノマトペ（擬音語、擬態語）であり、日本語ではこれが多用される。授業では、まず「『雨がしとしと降る』は英語で何というか」という質問を生徒に投げかけた。英語母語話者は即座にIt is drizzling.（or It drizzles.）と答えてくれた。英語では、オノマトペの代わりに、動詞を使って同じ内容を表現するしかないのだ。訳者は、日本語のオノマトペの感じを出したくて、ting! ting!と表現したのだろう。だがこれは英語としては無理な表現である。受講生からも異論が上がった。私も同感である。ニュージーランド人（男性）から「私はglisten（ピカピカ光る）という単語を使いたい」とう意見が出された。私も、glistenを使えば原文のオノマトペの感じがうまく翻訳できると思う。

ものすごく汚い台所だって、たまらなく好きだ。
床に野菜くずがちらかっていて、スリッパの裏が真っ黒になるくらい汚いそこは、異様に広いといい。ひと冬軽く越せるような食糧が並ぶ巨大な冷蔵庫がそびえたつ、その銀の扉に私はもたれかかる。油が飛び散ったガス台や、さびのついた包丁からふと目を上げると、窓の外には淋しく星が光る。

I love even incredibly dirty kitchens to distraction—vegetable droppings all over the floor, so dirty your slippers turn black on the bottom. Strangely, it's better if this kind of kitchen is large. I lean up against the silver door of a towering, giant refrigerator stocked with enough food to get through a winter. When I raise my eyes from the oil-spattered gas burner and the rusty kitchen knife, outside the window stars are glittering, lonely.

「そこ」は台所を指すと思われるが、意外なことにこの部分で悩む留学生が多かった。日本語ではこのような実例は少ないためだろうか。確かに「そこ」という代名詞に長い修飾語句がかかるケースは滅多にお目にかかれないかもしれない。「そこ」を「底」と解釈した生徒もいた。

「異様に」はstrangelyと訳されているが、これは明らかに誤訳である。訳者は「異様に」が「広い」にかかることを理解できなかったのだろう。It's better if this kind of kitchen is extremely large.とすれば原文に近い英訳となる。

「ガス台」もgas burnerではなく、gas stoveの間違い。だが翻訳をする以上、誤訳は避けられないものなので、授業では軽く指摘するに留めている。それよりも、なぜそのような誤訳が起きたのかを考えさせることの方が大切だ。その方が、誤訳の批判よりもはるかに建設的な作業となるからだ。

「淋しく」はやさしそうで、意外に難しい。淋しい＝lonelyだと短絡的に考えがちだが、lonelyという英語には「独りぼっち」というニュアンスがある。starを単数形にしてA lonely star is glittering.なら矛盾はないが、複数にすると違和感が出てくる。受講生からも、「ここは星がひとつだけ光っているのか？」という質問が出た。私は、ここでは星はたくさん光っていると思う。満天の星空かもしれない。原文には、「淋しさ（哀しさ）」と「美」が結びつく、日本人的な感受性が表れており、それがこの部分の翻訳を難しくしているのである。翻訳に窮したのだろう、英訳例は、英文として無理を承知で、lonleyを最後にもってきた。結局、どう訳したらいいのか結論は出なかった。なお、授業では「『淋しく星が光る』は主人公の心情を反映した表現。本当にさみしいのは孤児となった主人公なのでしょう」という秀逸な意見（インド人、女性）が出されたことを付け加えておく。

田辺家に拾われる前は、毎日台所で眠っていた。
どこにいてもなんだか寝苦しいので、部屋からどんどん楽なほうへと流れていったら、冷蔵庫のわきがいちばんよく眠れることに、ある夜明けきづいた。

Before the Tanabe family took me in, I spent every night in the kitchen. After my grandmother died, I couldn't sleep. One morning at dawn I trundled out of my room in search of comfort and found that the one place I *could* sleep was beside the refrigerator.

「拾われる」を、まだ日英翻訳に慣れていない留学生は、pick upという語句を使って訳して

いた。しかしこれでは、道端に転がっている主人公を田辺家が拾ったように聞こえてしまう。英訳例で使われているtake somebody in は、英々辞典ではto allow somebody to stay in your house（人を自分の家に滞在させる）と定義されているから、ここでは適切な訳語である。やはり「拾う」を take inと翻訳していたアメリカ人（男性）は、私が訳例を示した時、「やっぱり！」と思わず声を漏らした。

「毎日」をevery dayと訳した受講生はさすがにいなかったが、日本人学生であれば、「原文にそう書いてあるから」という理由でevery dayと訳すケースも出てきそうだ。もちろんevery dayとすると、昼間に眠っていることになるから誤訳となる。

「どこにいてもなんだか寝苦しい」を直訳すれば、Somehow I had trouble sleeping wherever I tried to.となるだろう。だが受講生の多くが「これでは理由が明示されていないからおかしい」という。「暑いから寝苦しい 」とか「ベッドが固くて寝苦しい」など、明確な理由をつけなければ英語では違和感があるという。訳者も、同じように考えたのだろう、「祖母が亡くなったので」つまり「祖母が亡くなった悲しみとショックで」という理由を挿入した。原文にはないこの一文を加えたことが適当な判断だったかどうかは、意見が分かれるところである。だが、これで内容が明確になり、英文として読みやすくなったことは確かであろう。

私、桜井みかげの両親は、そろって若死にしている。そこで祖父母が私を育ててくれた。中学校へ上がる頃、祖父が死んだ。そして祖母と二人でずっとやってきたのだ。

My parents—my name is Mikage Sakurai—both died when they were young. After that my grandparents brought me up. I was going into junior high when my grandfather died. From then on, it was just my grandmother and me.

My parents—my name is Mikage Sakurai という英訳に対する評価は、英語母語話者の中でも意見が分かれた。ひとりは「不自然だ」といい、もうひとりは「これならいいと思う」といった。私はこの英訳で問題はないと考えている。さて、落とし穴はその直後にあった。「そろって若死にする」をほとんどの生徒がthey died young togetherとしてしまったのだ。これだと、航空機事故などで同時に両親が死亡した、という意味になる。日本語の「そろって若死にしている」は「同時に死亡した」ではなく、「(時期は違うが) 比較的若い時期に死んだ」という意味であろう。訳例のようにboth died when they were young.としてはじめて日本語と英語のメッセージが一致するのである。

「祖母と２人でずっとやってきた」の英訳例には「ずっと暮らす」というニュアンスが抜け、「存在」だけがクローズ・アップされている。しかしこの訳例に対して、英語母語話者を含め誰からも異論は出なかった。英語として自然な表現だからだろう。

家族という、確かにあったものが年月の中でひとりひとり減っていって、自分がひとりここにいるのだと、ふと思い出すと目の前にあるものがすべて、うそに見えてくる。生まれ育った部屋で、こんなにちゃんと時間が過ぎて、私だけがいるなんて、驚きだ。

まるでＳＦだ。宇宙の闇だ。

... My family had steadily decreased one by one as the years went by, but when it suddenly dawned on me that I was all alone, everything before my eyes seemed false. The fact that time continued to pass in the usual way in this apartment where I grew up, even though now I was here all alone, amazed me. It was total science fiction. The blackness of the cosmos.

「確かにあったもの」を英訳しようとすると難しい。生徒の訳例を挙げよう。

This thing called a family, something I certainly once had, has dwindled and shrunk over the years.（ニュージーランド人、男性）

My family, something that is supposed to be always here, shrank down as time went by.（フランス人、男性）

1番目の訳文では「かつて確かに持っていた家族というもの」と原文を尊重しているが、2番目の訳文では、「いつもここに存在するはずの家族というもの」と意訳した。英文としてはぎこちないものの、原文のメッセージを汲み取った秀逸な訳だと思う。翻訳のセンスが光っている。一方、プロの訳者はこの部分を削除してしまった。文全体からすでにメッセージが十分に伝わっており、無理に「確かなもの」を英訳すると、おかしくなると考えたのだろう。

「生まれ育った部屋で、こんなにちゃんと時間が過ぎて、私だけがいるなんて、驚きだ。」も簡単にはいかない。まず「何が驚きなのかよくわからない」という声が受講生から上がった。「いつのまにか私がひとり取り残されている」のが驚きなのだと私は思うが、種々の解釈がありうる。訳者は「時間がいつも通りに過ぎて行ったこと」が驚きであると解釈した。受講生の訳例を挙げよう。

It is surprising for me to be alone in a room where I was not only born and brought up, but spent quite a few happy years of my life.（インド人、女性）

原文の「ちゃんと時間が過ぎて」という部分は、「私の人生の中で、多くの幸福な時間を過ごした」という後半部で表現されている。これは「翻訳」というよりも「翻案」に近い。彼女は作業中には、辞書は引かないことにしているという。原文を自分の中で消化し、それから自分の言葉で訳文を作ることに重点を置いているのである。何か詩的なものが感じられるのが彼女の訳文の特徴であり、私としては彼女の個性を高く評価したい。

なお、ここでは「ちゃんと」はどう訳したらよいかという疑問が多く出た。「ちゃんと」は広辞苑を引いても的確な訳語が出ていない。以下は『広辞苑』の定義である。

ちゃんと（副）
①すばやく。さっと

②基準に合致し、条件を十分満たしているさま。
③確かで間違いのないさま。

まさか時間が「すばやく」過ぎるわけがないから①は除外するとして③の意味だろうか？この国語辞書の定義から、英訳例のin the usual wayという訳語を捻り出すのは一苦労だ。また原文の「部屋」が、英訳ではapartment（アパートの一室）となっている。なぜそう訳せるのか、といぶかしげな顔をする生徒もいる。そこで私がコメントを出した。「これは小説全体を読めばわかること。訳者はここでapartmentとした方が主人公の立場、孤独感がよく伝わると考えたのでしょう」。これで受講生は納得したようだった。

4.「天声人語」

「天声人語」は、いわずと知れた朝日新聞朝刊の一面のコラムである。ジャーナリズム翻訳の基礎を学ぶにはもってこいだ。年4回、対訳付きで出版されている原書房版では、漢字にすべてルビが振ってあり、留学生には都合がいい。ただし、難点もある。コラムで使われている日本語である。新聞で使われる日本語、中でも「天声人語」の日本語は、語数を極度に切り詰めてあるため、解釈しづらいことこの上ない。このことは、日本語だけを読んでいると気づきにくいが、英訳してみると一目瞭然である。

私は「天声人語」の中でも、日本文化関係に関係するものを好んで取り上げている。日本関係のトピックを扱うことで、受講生の日本文化理解に少しでも役立てば、と思っているのはもちろんだが、将来、母国へ帰国した留学生が、日本事情を訳す時に役立つだろうと考えているからだ。

風呂敷
幼いころ、<u>来客</u>はよく<u>風呂敷</u>を手に訪れた。

Furoshiki reflects the nature of Japanese
<u>People who called on my father or mother</u> when I was a little child often came with <u>a gift wrapped in an all-purpose piece of cloth called *furoshiki*</u>.

明確にことばで表現されなくても、相手の意図を察するのが、high-context languageである。そしてその典型とされるのが日本語だ。日本語では明快に表現しなくても、同じbackgroundと「常識」を共有する日本の読者は理解してくれる。一方、英語は、言外の意味よりも言語に多くを依存するlow-context languageに分類される。だから英語で表現する場合、日本語のようには曖昧に表現すると誤解のもととなる。この両言語の違いが、もっとも明確に現れるのがジャーナリズム翻訳なのである。表面的な言葉の置き換えよりも、言葉の裏にあるメッセージを重視した翻訳スタイルを極端なまでに取るのが、このジャンルの翻訳の特徴だ。

ジャーナリズムの英語自体、何よりも明快な書き方を要求する。ジャーナリズムの表現スタイルは、すでにスタンダードが確立されているから、英訳の際に、それを無視して、曖昧な日

本語原文に寄り添うことはできないのである。

まずタイトルから見てみたい。日本語のタイトルは原書房で独自に付けたものだが、英語の見出しは、*International Herald Tribune／Asahi Shimbun* に英訳が掲載される際に付けられるものだ。日本語の見出しは「風呂敷」としていて、いったいどういう話なのか日本人読者があれこれ想像できる、いかにもhigh-context languageらしい見出しである。一方英訳では、Furoshiki reflects the nature of Japanese（風呂敷は日本人の特質をよく現わしている）として、全文のエッセンスを抽出したタイトルとなっている。

「来客」をguests, visitorsと直訳しようとする生徒は多い。だが、それでは「誰への来客」なのかわからなくなってしまう。自分への来客なのか、家族への来客なのか。それをはっきり示したのが英訳である。「（私ではなく）父か母を訪問した人々」として明快である。

原文では「風呂敷を手に訪れた」となっているが、英訳では、手にしていたのは「風呂敷に包まれた贈り物」である。さらに、風呂敷を単にfuroshikiと訳さず「風呂敷と呼ばれる、あらゆる用途に使われる布」としているが、このように日本の事物を訳す時に解説を加えるのは、ジャーナリズム翻訳の特徴である。留学生がこの手法を学ぶことは、特に有益だと思う。

中に何が入っているのか。形から中身を想像しながら、子ども心に期待して包みを見つめたものだ。カバンだと中からお菓子が出てくることはまずなかった。風呂敷からだと何でもあり、だった。

Expectantly, I would look at the furoshiki-wrapped package, trying to guess from its size and shape what the contents might be. If a guest carried a briefcase, there was little chance that he or she had some candy in it for me. On the other hand, a furoshiki-wrapped package could contain just about anything. The imagination ran wild.

「形」をshapeと訳しただけでは、イメージが十分に描けない。英訳例のようにsize and shapeとすると状況がよりいっそう明確になる。英語母語話者からは、「size and shapeとするのが決まった表現だから、そのように訳すのが好ましい」という意見も出された。

「子ども心に」を訳出するのは困難だ。英語には、この日本語に相当する表現はない。そこで、パラグラフの最後に「想像がかきたてられた」（The imagination ran wild.）という一文を補った。ニュージーランド人（男性）からは、「パラグラフを...contain just about anything.という文で終わると座りが悪い。The imagination ran wild.で終わった方が落ち着く」という意見が出された。文章の落ち着き、メッセージの過不足、その両方の面から見て、一見、原文にはない一文を最後に加えるのが適当だ、と訳者は考えたのだろう。そしてその判断は的確であったと、私も受講生も判断している。

furoshiki-wrapped packageがこのパラグラフでは2回使われている。最初の引用も含めると、第一パラグラフで、furoshikiが3回も使われている。名詞を何度も言い換える英語の表現としては、繰り返しがやや多いようにも思えるが、実はこのあとで風呂の起源を説明するときに効果を発揮する。furoという言い回しを読者の脳裏に残すために、訳者が意図的に行なった

「伏線」であると考えられる。

「カバン」をbagと訳した生徒もいたが、ウクライナ人（男性）はsuitcaseと訳した。「bagでは、なぜ中からお菓子が出てこないのか説明できない」というのが、その理由である。英訳例も、まったく同じ理由でbriefcaseとしているのだろう。こうして数回の日英翻訳の授業を受けただけで、すぐにプロの感覚を会得する留学生も出てくる。彼らの適応の速さには感心させられる。

風呂敷というからには風呂にかかわりがある。公衆浴場のようなものが流行し始めたころ、衣服を包んで入浴に行った。

The name suggests that the cloth's origin has something to do with *furo*, or bathing. The generally accepted theory has it that when going to the public baths became a fashionable practice in days of old, people wrapped a change of clothes in *furoshiki*.

英訳されてはじめて気づくことだが、「風呂敷というからには風呂にかかわりがある」とは厳密には「風呂敷という名前からわかるとおり、その起源は風呂と関係がある」という意味だ。日本人は通常、high-context languageの中にどっぷり浸かり、一流紙に掲載されるような文章でも、実は十分に言い尽くされていない。日本人読者は前後関係から推察して理解しているのだと改めて気づかされる。この部分を、Since it is called furoshiki, it has to be related with furo, the Japanese word for bathing.と直訳した生徒（ブルガリア人、女性）もいたが、彼女も日本で学習するうちに、日本的な思考法に慣れてしまったのかもしれない。

なおfuroでは英米の読者にはわからないから、必ず直前か直後に説明を加えるというのは、先ほど出てきた「風呂敷」と同じルールだ。ここで、前のパラグラフで繰り返しfuroshikiを使ったことが生きてくる。furoshikiがfuroと関連があることが、音の上で読者に明確に理解されるからだ。

次にThe generally accepted theory has it that....である。原文には無い語句を付加した例だが、これはジャーナリズム流の「誰がそれを言っているのかを明確にせよ」という原則に沿ったものと考えられる。「天声人語」の筆者の意見であるのか、誰かがそういったのかを明らかにするのが英語ジャーナリズムの原則だ。この場合は、発言者はわからず「一般的に認められている理論」とした。

In days of oldも原文にはない。日本人なら、公衆浴場へ行く習慣がここ数十年の間に起きたこととは思わないだろうが、日本のことを何も知らない英米の読者が読んだらどうだろう。最近のことだと誤解する恐れがある。日本人が前提としていることを英訳では補っているのだ。

最後に、「衣服」だ。ここを単にclothesと訳した受講生が目立った。まさかと思われるかもしれないが、原文を直訳すると「日本人は裸のまま公衆浴場へ行っていた」と読むこともできる。このことを受講生に説明すると、どっと笑いが起きたが、ここを「着替え」（a change of clothes）とした英訳例には納得してくれる。彼らもまた「日本の常識」から英訳している自分に気づいたのだろう。

湯上りには下に敷いて、その上に座って衣服を着た。それで風呂敷といわれるようになったらしい。

After stepping out of the bath, they would spread the furoshiki on the floor and sit on it as they donned their fresh attire. The wrapping cloth apparently came to be known as furoshiki because it served as a kind of rug.

「湯上り」は、すでに日本で「風呂体験」を済ませているためか、スムーズに訳せた生徒が多かった。情景を思い浮かべれば難しい翻訳ではない。

「下に」がon the floorであることも、日本の風呂を経験していさえすれば訳出は容易だろう。

「衣服」のところは、「着替え」を持ってきたと先ほど英訳で述べたから、矛盾がないように「新しい服」(fresh attire) を着るとしてある。

最後の because it served as a kind of rugは原文には無いが、「見合い」のところで述べたように、rug (敷物) というcultural equivalentを用いて説明した例である。bathroomで使われるrugといえば、西洋人は、日本の風呂で使われる「足拭きタオル」のようなものを想起する。この付加で、読者にはイメージが明確になった。

以上からわかるように、ジャーナリズム翻訳では、読者が日本文化について何も知らない、という前提で書かれているのである。英訳は、英米人が読むかもしれないが、アジア人だって読むかもしれない。ひょっとすると、日本事情などまったく知らないアフリカの読者が読む場合だってある。あくまで世界の広範な読者を予想し、「石橋を叩いて渡る」式を極端なまでに実行しているのが英訳例である。それに対し、日本人ならこの程度の常識はわかっているだろう、という前提で書かれているのが「天声人語」の原文である、と考えていいだろう。

〈風呂敷の物にしたがふあはれなり〉(高橋睦郎)。どんな形の物でも包むことができる風呂敷を意外な角度から見ている。風呂敷は日本人の器用さの象徴のようにいわれてきた。この句からは何にでも順応する日本人の従順さの象徴とも思えてくる。

Mutsuo Tskahashi has written a *haiku* on furoshiki: "I take pity in/ The flexibility of furoshiki/ To take the form of the thing it wraps." Furoshiki can indeed wrap things of any shape, and the poet is to be commended for pointing out a fact overlooked by most people. Many people equate furoshiki with the deft wrapping skills of the Japanese. But the poem also seems to present furoshiki as a symbol of obedience and pliability. Japanese, of course, are known for their readiness to adapt to almost anything.

俳句の翻訳は難しい。日本人でも、日本語の意味が捕らえにくいことが多いからだ。さらに「英詩」として通じるように訳そうとすれば、ほとんど不可能な作業のようにすら思えてくる。何となくわかったつもりになっても、いざ英訳するとなると戸惑ってしまう。

ここでは「あはれ」の解釈が分かれた。英訳ではI take pity in（気の毒に感じる）としているが、私は「あはれ」を否定的に取るのではなく、この語の第一義を尊重して、肯定的に解釈したい。『岩波古語辞典』では以下のように解説してある。

あはれ《事柄を傍から見て讃嘆・喜びの気持ちを表す際に発する声。それが相手や事態に対する自分の愛情・愛惜の気持ちを表すようになり、平安時代以降は、多く悲しみやしみじみとした情感あるいは仏の慈悲を表す。その後、力強い讃嘆は促音化してアッパレという形をとるに至った》

私ならI marvel at（私は驚嘆する）として、風呂敷に同情するのではなく、むしろ感心したと肯定的に訳したいところだ。英語母語話者も、「あはれ」を第一義に取り、inspiringという単語を使っていた。しかし全体的にみると、俳句の英訳例は、原文にはないflexibility（柔軟性）というキーワードを表出させていて、わかりやすくしかも「詩」になっている。名人芸というほかはない。

「意外な角度から見ている」は、多くの受講生が戸惑ったところ。「『見ている』の主語は誰か、『意外な角度から』とはどういうことか」という質問が相次いだ。英訳例では「たいていの人が見過ごしがちな事実を指摘した点で、詩人は賞賛されるべきだ」と内容を解釈し直し、言葉を補って訳してある。

「器用さ」は直訳すればskillfulnessだろうが、このコラムの主題は、日本人一般の器用さではなく「ものを包む風呂敷の巧みさ」だ。そこで訳者は、deft wrapping skills（ものを包む巧みな技術）と限定して訳し、趣旨を一貫させた。日本語では、文章の終盤に主題と関係のないことを持ち出して「文章に味わいを持たせる」ことが頻繁に行なわれる。もちろん、特にジャーナリズムの英語ではそんなことは許されない。ここでも、原文には「味わいを持たせる」傾向が出ているが、訳者はわずかの改変で、英語流の文章に直しているのだ。

「従順さ」は直訳すれば、obedienceである。しかしobedienceだけでは「相手の意のままに従う」というネガティブな意味合いばかりが強調される。受講生からも、「日本語の『従順さ』は悪い意味で使われるのか？」という確認の質問があった。ここで使われている「従順さ」はネガティブな意味ばかりではない。もっと中間的な意味であろう。この問題を解決するために、英訳例では、obedience and pliabilityとした。pliability（柔軟性）という一語を追加することにより、より中間的な意味あいが出てくる。「従順さ」という日本語のもつニュアンスがよく伝わっているように思う。受講生も、英訳例には納得した様子だった。

5.メッセージ重視と原文重視の流れ

これまで『日本まるごと辞典』、『キッチン』、「天声人語」という順序で論じてきたわけだが、辞典の英訳からジャーナリズム翻訳へ進むにつれて、翻訳の改変の度合いが大きくなるという印象を受けなかっただろうか？実際の授業でも、意図してこの順序で教材を扱っている。徐々に改変が大きくなった方が日英翻訳の手法を理解し、短時間で日英翻訳の全体像を理解してもらいやすいからだ。こうして全体の見取り図を知ってもらったあとは、受講生の意見を聞いて、

残りの授業を特定の分野の翻訳にあてることにしている。(例えば「天声人語」を中心にする、日本文学の作品を中心にする、日本事情の解説の英訳を中心にする、など)。

ここで日英翻訳の全体像を説明しよう。翻訳スタイルの一方の極に「原文重視」の逐語訳的な翻訳があり、その対極には「メッセージ重視」の意訳的な翻訳がある[3]。どんな翻訳も、必ずこの両極の間に位置していると考えられる。下の表を見ていただきたい。あくまで大雑把なものであるが、技術翻訳、特許翻訳、学術翻訳、法廷翻訳などは「原文重視」の流れに近い。しかし文学翻訳となると、幾分「メッセージ重視」寄りになる。そして「メッセージ重視」の極端な例が、いま見たばかりのジャーナリズム翻訳である。ジャーナリズム翻訳では、最後のパラグラフを最初に持ってくるなど、パラグラフの入れ替えまで自由に行なうこともある。「天声人語」の場合は、対訳で原文と対照されることを前提としているから、この程度の改変でとどめているのだと思う。

なお、この表は日英翻訳についてのものだが、参考までに英日翻訳がどこに位置するかも表中に示した。英日翻訳は、全体として、限りなく「原文重視」に近いのがおわかりいただけると思う。これは、古来からの、日本人の外国文化崇拝がいまだに影響している可能性があることは、小倉(2003)で述べた。[4]

表　翻訳スタイルから見た
日英翻訳の全体像

オリジナル重視	技術翻訳 特許翻訳 学術翻訳 法廷翻訳 文学翻訳 ジャーナリズム翻訳 (英日翻訳全般)	メッセージ重視

終わりに

本センターの卒業生ではないが、奈良教育大学大学院に在籍するルーマニア人留学生(女性)が、2004年に『キッチン』のルーマニア語版を出版したという。実をいうと、2003年に私の授業を受講したルーマニア人から、「『キッチン』を母国で出版するつもりで翻訳を始めている」という連絡を受けていたので、一足先を越されたという思いでいる。

ある日本文学作品が、すでに外国語に翻訳されていても、出版する理由さえ明確であれば(たとえば既訳は原作に忠実ではない。自分は原作の魅力を引き出す新訳を完成した、など)新たな翻訳を海外で出版することは可能である。また、英語以外の少数言語への翻訳となると、チャンスは無限に広がっているといっていい。私は、出版社への売り込み方も授業中に生徒に

話すことにしている。本センターの卒業生が、近い将来、母国で日本文学作品の翻訳を出版することを夢見ているからだ。また日本でジャーナリズム翻訳に携わりたいと考えている生徒もいるから、ジャーナリズムのプロもそのうちに輩出できるかもしれない。いずれにせよ、留学生たちは、素質豊かなプロの卵（すでにプロとして活動しているものもいる）ばかりであるから、私の夢は、近い将来にかなえられるだろうと楽観的に考えている。留学生たちのキャリアのために、この授業が少しでもお役に立てば幸いである。

最後に、外国人留学生に「翻訳」の授業をするという、貴重なチャンスを与えてくださった、本センターの諸先生方に厚くお礼を申し上げたい。

注

テキストとしては以下のものを使用した。

『イラスト日本まるごと辞典』改訂第2版、講談社インターナショナル（2001）

吉本ばなな『キッチン』新潮文庫（2002）

Banana Yoshimoto, English Translation Megan Backus, *Kitchen*, Faber and Faber, 1993

『天声人語2002冬』Vol.131、原書房（2003）

（1）正確な授業題目は「通訳者になるための実践コースPractical Interpretation」と「日英翻訳者になるための実践コースPractical Translation (J to E)」であり、いずれも日本語・日本文化研修留学生(J)と研究留学生上級（RA）を対象とした選択科目である。

（2）北條文緒『翻訳と異文化』みすず書房（2004）p.140。

（3）川本皓嗣・井上健編『翻訳の方法』東京大学出版会（1997）の中で、大澤吉博が「訳文尊重主義」「原文尊重主義」として、筆者と類似した説を唱えているのを発見した(pp.140-1)。筆者以外でこの問題を指摘しているのは、大澤のみと思われる。

（4）小倉慶郎「英日翻訳試論—なぜ英日翻訳には、二つの相反する流れがあるのか」日本英語コミュニーケーション学会紀要、第12巻第1号（2003）。

（おぐら　よしろう　　本センター非常勤講師）